

学位論文内容の要旨

| 学位申請者 | 齊藤 彩 【人間発達科学専攻 平成26年度生】 | 要 旨 |
|-------|------------------------------|--|
| 論文題目 | 思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連メカニズム | <p>本論文では、思春期における子どもの注意欠如・多動傾向が学校および家庭での適応状況を通じて二次的な不安な抑うつ等の情緒的な問題と関連するメカニズムについて実証的な検討がおこなわれた。</p> <p>序章から第3章では、当該領域における先行研究の総覧より、本テーマに関する実証的検討の先端性や希少性が論じられ、本論文の意義や目的、方法が述べられた。続く4章では、関連メカニズムに関する行動遺伝学的な2つの研究（小学校5年生から中学校2年生の787組の双生児データを用いた二変量遺伝分析、および小学校5,6年生と中学校1,2年生の2時点における一卵性双生児（N = 194）の縦断データを用いた一卵性双生児差異分析）から、注意欠如・多動傾向から情緒の問題への因果関係が確認され、その背景には遺伝要因とともに個人に特有の効果をもたらす非共有環境要因が寄与していることが明らかにされた。5章から7章では、単胎児を対象とした3つの研究（中学生826名と担任教員22名を対象とした学校調査、小学校5年生（Time 1）、小学校6年生（Time 2）、中学校1年生（Time 3）の3時点における子ども（N = 202）とその母親を対象とした縦断調査、小学校5年生の子ども（N = 202）とその両親のデータを対象とした横断調査）から、注意欠如・多動傾向の高い子どもは、学校でのネガティブなライフイベントの多さとポジティブなイベントの少なさを經由して自尊感情が低下し、その後抑うつや不安等の情緒の問題が高まる連続的な因果の流れについてのパスモデルが提唱された。8章の総括的討論において、注意欠如・多動傾向が高い思春期の子どもは、遺伝要因と環境要因の両側面において情緒の問題のリスクの高さを抱えていることを認識する必要性に言及するとともに、後の情緒の問題を予防、軽減するために、学校におけるポジティブな経験の増加やネガティブな経験の減少を子ども自身が実感できるようなケア・サポートを充実させること、そして自尊感情を育成していくことの重要性について論じるとともに、サンプルバイアスの問題や臨床群での検討の必要性など本研究の限界や今後の課題が示された。</p> |
| 審査委員 | (主査) 教授 菅原 ますみ | |
| | 教授 大森 美香 | |
| | 准教授 上原 泉 | |
| | 教授 石口 彰 | |
| | 准教授 富士原 紀絵 | |